ジョジョの奇妙な冒険～荒ぶる鋼鉄～

ストローヘッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョジョの奇妙な冒険～荒ぶる鋼鉄～

【Ｎコード】

Ｎ５２０１Ｄ

【作者名】

ストローヘッド

【あらすじ】

２０ｘｘ年。普通の高校生、東條司の周りでは徐々に何かが変わり始めた。承太郎との出会い。そして自らにも発現したスタンド能力。司の奇妙な冒険が始まる。

プロローグ

２０ｘｘ年

一人の老人が死にかけていた。

「ディ、ディオ様・・」

病気に蝕まれ余命ももはや数時間しか残されていたない老人はやせ細った手で首をかきむしりながら一人の男の名前を呼び続けていた。

「ディオ様、ディオ様～」

老人が呼び続けている男は老人にとっては神と同位、あるいはそれ以上に崇拝していた人物。しかし数十年前の戦いで死んでしまった男。

老人は死線をさまよう中自らが神と崇めた人物が殺されるシーンを何回も思い起こしていた。

「くそ、空条めがぁ～、私のディオ様を、私の神を～」

この男には自らが神と崇めたディオやその仇（かたき）である空条承太郎等が持つ特殊な能力“スタンド”を発現してはいなかった。

スタンドとは自らの精神エネルギーが凝縮したものであり、人型のものや、あるいは刀剣や銃などの武器に宿るもの、人形やカード等の道具や日用品に宿っているもの等、人により様々な形をし、それは自由に動き攻撃したりする。

そしてこのスタンドを操り見ることのできる者をスタンド使いという。

スタンドには以下のルールが存在する。
1・スタンドはスタンド使いの意志で動き、動かされている。
2・スタンドはスタンドでしか攻撃できない。
3・スタンドが傷つけば、そのスタンド使い本体も体の同じ箇所に同じ傷がつく。
4・スタンド使いが死ねばその本人のスタンドも消滅する。
5・スタンドが消滅すれば逆にスタンド使いも死ぬ。
6・スタンドのエネルギー・力の強さはその距離に反比例する。本体とスタンドの距離が近いほど力は強く、正確性、スピードもあるが、二つの距離が遠いほど力は弱くなり、スピードも遅く大雑把な動きになる。
7・つまりスタンド使いには上手い下手がある。
8・スタンドは遺伝し、一人につき1能力。本人によっては成長する場合がある。
（ジョジョの奇妙な冒険第七部ＳＢＲ１０巻より抜粋）

しかし、この時老人に奇跡が起こった。
虚ろな精神の中自分を呼ぶ声が聞こえたのだ。
「ダーズよ。オマエに力をやろう」
よくは見えなかったが自分の横に黒いフードを被った男が立っていた。
「オマエに、オマエが崇拝した男を甦らせる力をやる」
フードを被った男は懐から一本の矢を取り出した。

独特な彫刻が施され明らかに数百年～数千年の時を存在し続けたであろうその矢をフードを被った男は躊躇なくダーズの心臓へと突き刺した。
「ぐぇっ！？」
矢を刺され苦しみ悶えるダーズ。
「大丈夫だダーズ。我がムーンチャイルドの能力で既に傷は癒えている。これでお前も念願のスタンド使いだ」
ダーズがそのしなびた腕で胸を確認すると確かに傷はふさがっていた。
「さぁダーズ！オマエのスタンドを発現するんだ！」
その瞬間、ダーズの横には長い鼻を持ち、白と黒の肌を持ったバクのようなスタンドが現れた。
「ＤＲＥＡＭＳ　ＣＯＭＥ　ＴＲＵＥ・・」
ダーズのスタンドＤＲＥＡＭＳ　ＣＯＭＥ　ＴＲＵＥはダーズの頭に鼻を吸いつかせ何かを思い切り吸い出すと、耳から紫色の煙を吹き出した。
吹き出した煙はやがて集まり、固まり、一人の人間を造り出した。
「成功だ」
黒いフードの男は歓喜に満ちていた。
フードの男の視線の先には、あのディオが立っていた。
かつて多数の人間を殺し、死闘の末、空条承太郎に倒された金髪の悪魔ディオの姿がそこにあった。
「ディオさま・・！！」
フードの男が近づこうとするとディオは何かの気配を感じたのかすぐさまどこかへ行ってしまった。
「ディオ様、いったい何処へ！？」

ディオがどこかへ行ってしまい戸惑うフードの男の後ろで別の気配がする。

「やれやれだぜ・・」

フードの男が後ろを振り向いた瞬間、白金色の無数の拳が男を捉えた。

「オラ！！」

一瞬で完全に戦闘不能に陥ってしまったフードの男の前には、史上最強のスタンド、スタープラチナ（星の白金）を操る空条承太郎の姿があった。

「ディオ、逃がしはしない・・」

承太郎はディオの後を追い、残されたダーズは病気により静かに永遠の眠りについた。

アイアン・テンペスト

ここはＴ都。
公立高校二年生の東條司にとって今日は普段と何も変わらないごく普通の日のはずだった。

司の家は学校から歩いて１０分ほどの所にあり今日も学校を終え、音楽を聞きながら家路についていた。
しばらくして家の近くの交差点で司は信号待ちをしていた。
司は音楽を聞いているため自分の背後で二人の若者が言い争いをしていることに気づいていない。

そして、司の数奇な運命は廻り始めた。背後でもめている若者の一人が殴り飛ばされ、それに押された司の体がまだ赤信号の横断歩道に押し出されてしまい、それに合わせるかのように司の目の前に一台のトラックが現れた。
（あ、オレ死ぬじゃん）

人はこのような状況に陥ると1秒が何分にも感じることがある。そして全てがスローモーションに見える司の目の前に突如一人の男が現れた。

後ろ髪と一体化したように見える帽子をかぶり学ランを着た、とても現代の人間に見えないその男は司のことを抱えると、背中の辺りから人型の幽霊のような何かを出し、気づいた時には司の体は歩道へと戻っていた。

「ハァ、ハァ、ハァ」

「大丈夫か？」
司が改めて自分の命を救った男を見ると身長は１９０センチ近くあり、見間違いかと思った幽霊はまだそこにはっきりと立っていた。黒い髪をなびかせ男と同じポーズをしながらただ、静かに司のことを見下ろしている。
「なんだその幽霊は・・？」

瞬間、男の顔色が変わった。
「お前、スタンドが見えるのか！？」

司自身も自分の目が信じられないといった表情で何度も眼を擦るが幽霊のようなそのビジョンが消えることはなかった。
「なるほど、どうやらオレはお前に呼ばれてここまで来たらしい」

嫌がる司を無理やり従わせ、空条承太郎と名乗る男はここまでの経緯を話し始めた。
自分が現代の人間ではなく、ディオと呼ばれる悪魔のような人間と共にディオの部下のスタンドで甦ったこと、自分とディオはもうしばらくで消えてしまうこと。
そして、
「この街には、危機が迫っている」ということ。

「危機？」

「あぁ、俺たちはいわばエネルギーの塊だ。ディオの野郎は自分のエネルギーを分割し、お前のように才能を持つものにスタンド能力を発現させ、そして、自らを復活させるスタンドを探させるだろう」

「それが危機？」

「奴の力をもってすればどんな人間も邪悪になり、そのスタンドでこの街は壊滅する」

「それでオレにどうしろっていうんだよ？スタンドなんか持ってないぜオレはよぉ」

司がいい加減帰ろうとした時、承太郎は自らの胸に手を突っ込んだ。血が出るわけでもなく、まるで泥の中に手を入れたようにすると一つの星のようなものを取り出した。

「とっておけ」

司が承太郎から星を受け取ると、突然星は皮を裂き、肉を千切りながら司の中へと入っていく。

「う、うわぁぁああ～なんだよこれはぁぁ～！？」

司が必死に取りだそうとするが何か巨大な力に導かれるように星は司の中に入り、人生最高の激痛は嘘のように消え失せていた。

「オレの力を分けた。これでオマエもスタンド使いだ」

「何すんだテメェ・・！？オレがいつそんなコトを望んだよォォ！」

司が怒り噴騰で承太郎を見ると、スタープラチナにより投げられたコンクリートとの塊が凄まじい勢いで司へと飛んでくる。

「うぉをぉ！？」

とっさに身構えた司だがあまりの超スピードによけることができない。

（当たる！！）

しかし、コンクリートの塊は司の前でチリになって消えた。わけも分からず振り向く司の後ろには蒼と白のカラーリングのスタンドが立っていた。

「それがお前のスタンドだ」

「オレのスタンド・・？」

「オレが名前をつけてやろう。そのスタンドの名前はアイアン・テンペスト（荒ぶる鋼鉄）」

司は妙な高揚感に浸っていた。言われずとも分かる自分に発現したスタンドという能力の凄さに思わず身震いするほど。しかし面倒に巻き込まれるのも困る。

「ちょっ、こんなのいらねぇ！戻せよ！」

司が見た先の承太郎の体は既に消え始めていた。

「もう時間だ。」

「待てコラ戻して行けよ！！」

「それはもう無理だ。諦めろ。それよりもオマエが今心配しなければいけないことはこれから出会うであろうディオのスタンド使いのことだ」

「こんな奇妙な能力を持ってる奴にホイホイ出会うわけがないだろ！」

「いや、必ず出会う。スタンド使いどうしは引かれ会うものだ」

「ますます消してくれよ・・」

消えゆくなか承太郎は司に渡した力の欠片から司の中に何か大きな力を感じた。

「オマエは強い精神を持っている。やり遂げることができるだろう」

そして、承太郎の体は跡形も無く消え去った。

「これからどうなんだ・・」
承太郎が消えた後、司は1人立ち尽くしていた。

モンスターピアレンツが来た！その１（前書き）

前話の後半を多少改変いたしました。お手数ですが見ていただけるとうれしいかと思います。

モンスターピアレンツが来た！その１

スタンドに目覚めてから３日。司は今のところディオのスタンド使いには遭遇していなかった。
承太郎に言われ、多少意識して周りを警戒しているが特に変わったこともない。
（ほんとにオレ以外にスタンド使いなんていんのかよ？）
司はいつもと同じように学校からの帰り道の途中、踏切が開くのを待っていたいた。
各駅が通り、ここで開けばいいものを一分ほど急行が行くのを待ち、また各駅が通る。
毎度のことながら、いい加減ムカついてきたときやっと踏切が開いた。
（やっとか）

ふと司が前を見ると踏切の向こうに異様な格好の男が立っている。
身長２メートルほど、アメフト選手のような格好をし、手には巨大な斧。ヘルメットをかぶる顔からは怪しく二つの眼が光っている。
「フシュュュュゥウ・・」
あれだけ異様なものが立っているというのに周りの人はまるで気にしてない様子。まるで見えていないかのように。
司は直感した。
「あれが敵のスタンドか・・」
司は走り出すと、敵のスタンドにアイアン・テンペスト（以降Ａ・Ｔ）の拳を嵐のように浴びせかけた。

「オーラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

しかしコンクリすら砕いたＡ・Ｔの拳をあれだけ浴びたにもかかわらず敵のスタンドは何事もなかったように立っている。さらにはその手に持った斧を司めがけて振り下ろしてきた。

「おっとぉ！」ギリギリでかわした司はきた道を走り始めた。

「３６計逃げるが勝ちってか！！」

司と敵スタンドの様子を遠くの喫茶店のような所からみている人間がいた。

「あれがディオ様が言っていた承太郎とか言う奴の力で目覚めたスタンド使いか」

その男は司が逃げる姿を見るとフッと笑った。

「あんな屑はこのラッチョのモンスターピアレンツが斬り殺す」

ラッチョはテーブルにあるコーヒーを飲み干すと席を立ち店を出ると時計をみた。

「まだヒマだし切り刻むところはオレ自身見に行くか」

ラッチョは司のあとを追った。

モンスターピアレンツが来た！その２

司は走り続けていた。
敵スタンド自体の移動速度はけして早いものではないが、追跡能力のようなものがあるらしくしつこく追いかけてきた。

「やっとまいたか？もういない・・よな？」

腰をおろして今自分がきた道を確認する司。どうやら敵スタンドはいないようだ。
逃走中、何度かＡ・Ｔの連打を与えたがまるできいておらず、結果逃げるしかなくなったのだ。
「ハァ参ったぜ。タクよぉ」

一息入れた司はズボンをはたくと再び家に帰ろうとした。
しかし、そう簡単に事は運ばない。コップに注がれた水がいつか必ず溢れ出るように、当たり前に奴はそこにいた。
「フシュュュユゥウ・・」

「なんでまた・・？」
司の丁度１０メートル程先のところに変わらぬ姿で再びモンスターピアレンツは立っていた。

再び、逃げ出した司だが何度突き放してもモンスターピアレンツは姿を現す。
「これじゃあ埒がアカねぇえ。ならば本体を、直接叩くしかねぇ」

とりあえず辺りを見回す司だが自分以外まるで誰の気配もしない。
「ここままじゃ、やられる・・きっとあの野郎の斧でミンチにされ

て腐らないウチにハンバーグにされちまう！オレに何が足りない！？どうしたら勝てる？」

司はＡ・Ｔを出すとモンスターピアレンツに再度殴りかかった。
「オーラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！」
何十、何百回と拳を叩き込んでもモンスターピアレンツは全く動じない。それどころか、ひたすらに殴り続けていた司の腹にモンスターピアレンツの巨大な拳が深々とめり込んだ。
「ぐはっ・・！？」

鈍い音ともに司の体は吹き飛び、回収されずにあったゴミの山へと突っ込んだ。

「わかった・・」

体を突き抜ける痛みと共に密かに確信した。
（敵のスタンドは追跡型。一定間隔離されると約１０メートル内に瞬間移動する。そして、オレに足りないものは・・）

ゴミ山から起き上がった司はＡ・Ｔを見た。
「オレに足りないのは知ることだ。オレはまだＡ・Ｔの事を全く理解していない。どんな能力があるのかも。学習しなければＡ・Ｔに秘められた能力ってやつをヤツをぶっ飛ばす方法ってやつをよぉおぉぉ！？」

走り出す司。逃げるためではなく、勝つために今は時間が必要だ。
司は走りながらとりあえず辺りを殴りまくったが何も起こらない。
承太郎に力を貰った時、同時にその記憶の一部が流れ込んできた。
（Ａ・Ｔにはスタープラチナのような正確さも力もない。なら何かしらの能力があるはずだ）

必死に考えながら走る司。
その時、司の横を何かがもの凄い勢いで通過して行った。
「・・・？」
司が振り向くと、顔面目掛けてまたもの凄い勢いで何かが飛んできた。
「うおっ！？」

とっさに掴み取ったそれはさっきＡ・Ｔが砕いたコンクリートの一部だった。
「昔のヤツが林檎が落ちるのを見て重力を発見したように、風呂桶が溢れるのを見て表面張力を発見したように、きっかけが必要だったんだ。なるほど、わかった。理解したぜ！」

司はモンスターピアレンツの前に立った。
「そしてこれはオレに与えられた試練だ。オレはそう受け取った！テメェを倒してオレは強くなる」

モンスターピアレンツが来た！その３

ラッチョの過去について少しばかり話したいと思う。

ラッチョ・ドリアーノはこれまで挫折というものを味わったことがない。

生まれたころから彼の周りは彼を中心に動き続け、小中高と有名進学校に通い当たり前のように

「神童」と呼ばれた。

そんな彼はこの世界を見下していた。

友達ヅラして近づいてくる奴らも自分をダシに甘い汁をすする親も無益な戦争を続ける世界の人々も下等な虫にしか見えなかった。

そんなラッチョに初めての絶望感を、家畜の糞を喰らうような屈辱感を敗北を味会わせた人物こそ、スタンドにより復活したディオその人である。

その瞬間からラッチョの神はディオになった。

自分の力など取るに足らない微々たるもの。

自分こそが神になるべく者なんてとんだ思い違い、傲りだったと、神とはディオ様のことだとそう認識したのだ。

「ディオ様の願いこそが我が願い！空条承太郎の使徒は私が取り除く！ディオ様が治めている世界こそ下等な者共が唯一幸福に暮らせる世界なのだ」

そして、今闘っている者こそ障害。取り除かなくてはならない障害なのだと。

ラッチョが司のもとに現れた時、既に司は虫の息だった。

地面に転がる、捨て去られた人形のような、生きている気配をさせないその物体を見下ろすラッチョはこの上ない幸福感に包まれていた。

「ディオ様！私はこのラッチョは空条の使徒を討ち滅ぼしました！」勝ち名乗りを上げるラッチョの足元を寒気が襲う。

「ちょっと、待てや・・」

驚き、後ろに跳んだラッチョの目の前で司は静かに立ち上がった。

「貴様ァアアア～生きてやがったのか！？」

「やられっぱなしでくたばるわけがないだろ。オレは待っていたんだよこの時を、本体である貴様が現れるこの瞬間をォ」

「ハッ！死にかけの貴様に何ができる！私はディオ様の福音をへたのだ。それに貴様ごときスタンドに我がモンスターピアレンツが倒せるわけがないだろがァアアア～～？！」

不敵な笑みで笑う司。

「なにが可笑しい！？」

「あるんだよ。だがよ、コイツはオレ自身も相当痛いぜ気絶しちまうかもしれねぇ～ホントは他の方法もあるだがよ。でも、そんなのは関係ないんだ。大事なのは勝つことだ、オレの拳でヤツを倒すこと、それが最優先事項だ！」

息絶え絶えに言い放った司は拳を振り上げるとＡ・Ｔを出し自らの体を思い切り殴り飛ばした。

「それが貴様の切り札か！？なんて浅はかで愚かな行動！それで私のもとまで飛んできて一撃入れるつもりだろうが、そんなチャチな拳が私にきくか～！！・・・あ？」

ラッチョが気づいた時、司の、Ａ・Ｔの拳はすでに顎を捉えていた。

「ぐあォオぇアアアア～！？」

奇声を発して吹き飛ばされたラッチョ。その顎は粉々に砕け散り、ラッチョと確認できないほどだった。

そして、その横に立つ司。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハハ、勝ったぞ、オレの勝ちだ！！」

A・Tの能力それは物体の加速。
あの瞬間、司は自らの体を殴り飛ばすことによって超加速し、見事ラッチョを倒すことができたのだ。

「あらら、顎が砕けてるよ。知～らね」けしてスマートな勝ちではなかったが司にとってはこれ以上ない勝ちとなった。

ラッチョ・ドリアーノ
顎粉砕骨折。頭部強打による記憶障害により戦闘復帰不可。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5201d/

ジョジョの奇妙な冒険～荒ぶる鋼鉄～

2010年10月11日16時08分発行